手塚マンガを活用した生命倫理教育
―新しい高等学校学習指導要領「倫理」を踏まえつつ―

宮村悠介（愛知教育大学）

Education of Bioethics by way of Tezuka's Manga

MIYAMURA Yusuke

１　手塚マンガと生命倫理教育

二〇一九年は手塚治虫の没後三〇年目にあたる。昭和天皇崩御の約一ヶ月後に没した手塚治虫は，令和の時代の学生たちにとっては，自分が生まれる以前に活動した過去の人物であるが，手塚のマンガ作品自体は，令和の時代の学生にもなお広く受容されているようである。筆者の周辺の多くの学生も，小学校時代に学級文庫や図書館で『ブラック・ジャック』などの手塚マンガを読んだり，教育実習先の小学校で手塚マンガを読む児童を見かけたりと，学校を通じて何らかのかたちで手塚マンガと関わる体験をしてきている。筆者が大学の授業の導入などで手塚マンガを取りあげるときも，学生の反応は多くの場合かなりよい。マンガ表現の方法論の文脈で語られる,「テヅカ・イズ・デッド」(1)という命題は，少なくとも学校教育の現場に関しては当てはまらず，今もなお「テヅカ・イズ・ノット・デッド」あるいは「テヅカ・イズ・アライブ」とでも言うべき状況が，続いているように思われる。

ただ多くの学生にとって手塚マンガとの関わりは，小学校高学年の時期に限定されている。しかし手塚マンガは，高等学校および大学での「倫理」の授業においても，大いに活用しうる余地があるはずである。まずマンガという媒体自体が，倫理の教材として適している。SF 映画を教材とした生命環境倫理の教科書において，編者の吉川孝は，生命環境倫理にとっての映画という教材の利点として，①理論や概念の例示，②登場人物との立場交換の可能性，③状況の詳細な描写，④イメージの具体性，の四点を挙げている(2)。これら四つの利点は，すべてマンガも共有しうるものである。逆にマンガを教材とすることの難しさとしては，日本のマンガには長編作品が多く，そのすべてを教科書や参考書として購入させることが困難であることが指摘されるが(3)，物語のテーマを凝縮したコマなりページなりを教師が厳選して提示し，その場面や登場人物についての背景となる情報を補って説明するといった手法をとれば，長編作品でも十分に授業で活用しうるはずである(4)。

とりわけ手塚マンガは，物語のテーマが凝縮された場面を取りだしやすく，しかもそのテーマ自体が「倫理」の授業の題材として適している。手塚は繰り返し，自分のマンガの一貫したテーマが,「生命の尊厳」であると語っている(5)。そしてこの「生命の尊厳」に対応する主体の側の態度である,「生命に対する畏敬の念」こそが,高等学校学習指導要領「倫理」のキーワードなのである。もちろんこうしたあまりにも教科書的なテーマに，倫理学的な議論の水準の点で不満を覚える余地もあり，たとえば過激な思考実験を好む，マンガで哲学する哲学者からは，手塚は「殺人はいけない」という一般的な倫理規範の根拠までを問いただすことをしない,「大衆的な大御所マンガ家」と評価されている(6)。ただ，社会通念を根本から問いなおすこころみも許容しうる大学での学びではともかく，まずは社会

通念を教えることが求められる高等学校の教育では，手塚マンガは適切な教材たりうるであろう。

本稿では以下，新しい高等学校学習指導要領「倫理」を，キーワード「生命に対する畏敬の念」を軸に分析したうえで（２），その分析を踏まえて，手塚マンガを活用した高等学校での「生命」をめぐる倫理教育を提案したい（３）。

２　高等学校学習指導要領「倫理」における「生命に対する畏敬の念」

平成三〇年に告示された新たな「高等学校学習指導要領」（以下,「指導要領」）において，公民科の選択科目「倫理」の目標は，冒頭の柱書で次のように規定されている。

> 人間としての在り方生き方についての見方・考え方を働かせ，現代の諸課題を追究したり解決に向けて構想したりする活動を通して，広い視野に立ち，人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念に基づいて，グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

『高等学校学習指導要領（平成３０年告示）解説　公民編（平成３０年７月）』（以下,『解説公民編』）[7]によれば，この柱書は四つの部分からなり，①「人間としての～働かせ」の部分が，「倫理」という科目の特質に応じた「視点や考え方」であり，②「現代の～通して」が主体的・対話的で深い学びを実現するための活動，④「広い視野に立ち」および「グローバル化する～育成することを目指す」は，公民科全体および公民科の各教科に共通の目標である（八七頁）。そして④の部分に挟まれた，③「人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念に基づいて」が，「倫理」に固有の表現である。公民科の選択科目「倫理」とは，公民科に共通の目標である「グローバル化する国際社会に主体的に生きる……公民としての資質・能力」の育成を，あくまで「人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念」を基盤として目指す科目である，と定義できるであろう。このうち「人間尊重の精神」は,『解説公民編』によれば，民主社会の基本的な精神であるが，本稿が注目したいのは，もう一方の「生命に対する畏敬の念」という表現である。この表現は，前回の学習指導要領の改訂のさいに新たに目標に加えられたものであるが[8]，今回の『解説公民編』によれば，「人間だけでなく全ての生命のかけがえのなさに気付き，生命あるものを慈しみ，畏れ，敬い，尊ぶこと」（八七頁）を意味する。またこの「畏敬の念」は，「生命に対する畏敬の念に根ざした人間尊重の精神を培う」（同頁）という表現からも見てとれるように，民主社会の基本精神である「人間尊重の精神」をも支える精神として位置づけられている。「グローバル化する国際社会に生きる資質・能力」を，「人間尊重の精神」を基盤として育成し，またその「人間尊重の精神」を，「生命に対する畏敬の念」に根づかせる，という具合に，公民科「倫理」において「生命に対する畏敬の念」は，もっとも根本的な精神として位置づけられているのである。

とはいえ，具体的な教科の内容との関わりなしに，「生命に対する畏敬の念」だけを教えるのは難しいであろう。公民科「倫理」の内容は，「指導要領」では，主に心理学と思想史

の内容を扱う「A　現代に生きる自己の課題と人間としての在り方生き方」と，応用倫理や共生社会の問題を扱う「B　現代の諸課題と倫理」のふたつに分かれている。このうち「指導要領」のAのなかでは，古代ギリシアから近代までの思想，および世界三大宗教と儒教などを取りあげるさいの視点として,「人間の尊厳と生命への畏敬」という表現が登場する。そして『解説公民編』において,「生命」の問題について詳しい説明が与えられているのは,「仏教」(内容の取扱い）の段落においてのみである。『解説公民編』によれば，仏陀の言行や大乗仏教の思想を自己の課題と重ね合わせ思索するさいの具体例として,「生命あるもの全てに対する慈悲の教えについて，自己の課題と重ね合わせて思索」し，そのことで「生命の大切さ」についての思索を深める，という例が挙げられている（九八～九頁)。公民科「倫理」の根本精神である「生命に対する畏敬の念」について，思想史の学習のなかで掘り下げて考えを深める場面としては,『解説公民編』においては，とりわけ仏教思想が念頭に置かれていると見ることができるであろう。

また「指導要領」の「B　現代の諸課題と倫理」のなかでは,「(１）自然や科学技術に関わる諸課題と倫理」のなかで,「生命，自然，科学技術などとの人間との関わり」という文脈において,「生命」という用語が登場し，その「生命」という内容の取扱いについて,「生命科学や医療技術の発達を踏まえ，生命の誕生，老いや病，生と死の問題などを通して，生きることの意義について思索できるようにすること」とされている。『解説公民編』は，その具体例として,「生命への人為的な操作や治療を超えた介入など，近年の生命科学や医療技術の発達に伴い，従来の死生観のみでは対処できない様々な問題が生じていること」に触れることを挙げたうえで，これらの問題が「私たち一人一人の生命の尊さに関わる問題である」とともに，家族や地域や社会の問題でもあることにも留意する必要があると指摘している（一一四頁)。ここで例として挙げられているのは，典型的な生命・医療倫理の問題であるが，その生命・医療倫理の問題を通じて,「生きることの意義」や「生命の尊さ」についての考えを深めることが求められているのである。

以上のように,「指導要領」および『解説公民編』の分析の結果として，公民科「倫理」のもっとも根本的な精神が「生命に対する畏敬の念」にあること，またその精神を深めうる具体的な教科の内容として，思想史における仏教思想，および応用倫理における生命・医療倫理がまず挙げられること，が明らかになった。なお公民科「倫理」は高等学校における道徳教育の役割も期待されており,『解説公民編』では,「倫理」の指導において,「中学校の道徳教育における指導を受け継ぐよう，十分関連を図る必要があ」り，しかも他方では「指導内容が中学校から高等学校へと一層深化，発展したものとなるよう配慮する必要がある」(一一八頁）とされている。「中学校学習指導要領」の「特別の教科　道徳」において,「生命の尊さ」は,「D　主として生命や自然，崇高なものとの関わりに関すること」のなかの一項目として位置づけられている。ただこの「指導要領」の『解説』では,「生命倫理に関わる現代的な課題」などを取り上げつつ「生命尊重への学び」を深める，この「生命の尊さ」という項目は,「道徳科の内容全体に関わる項目」であるともされており[9],「生命の尊さ」や「生命に対する畏敬の念」が中心的位置を占めることは，中学校の「道徳」も高等学校の公民科「倫理」と同様である。その同じ内容を発展させ深化させることが，公民科「倫理」には求められていると言えるであろう。また今回の学習指導要領

の改訂では，公民科「倫理」の指導において，先哲の原典の日本語訳や口語訳を活用することが強調されているが，他方で『解説公民編』では，「生徒の実態に応じて，いわゆる古典と呼ばれる書物だけでなく，より日常的な言葉を用いた文章」なども含めることが示唆されている（一二〇頁)。「マンガ」とははっきり書かれていないものの，生徒の実態に応じて，いわゆる古典や原典ではない，生徒にも分かりやすいマンガなどを活用する余地もあると考えることができるであろう。

３　手塚マンガの活用

公民科「倫理」の根本的な精神は「生命に対する畏敬の念」である。この精神をどのように教えることができるだろうか。先に言及したように，手塚治虫は自分のマンガの一貫したテーマは「生命の尊厳」であると語っていたが，そのことを子どもに教えるための教材の提案も行っていた。たとえば手塚が学んだ時代，「咲いた。咲いた。さくらが咲いた」といった内容であった小学校一年生の教科書を，手塚は自分なら以下のような内容にするという。

> ぼくなら，その教科書の最初のページに，ちょうちょが飛んでいる絵を描いて，
> 「ちょうちょが飛んでいます。楽しそうですね」
> つぎの見開きに，こんどはクモの巣に引っかかったちょうちょを描いて，
> 「ちょうちょが死んでいます。かわいそうですね」
> こういうところからはじめたいと思います。
> それは，子供たちがじっさいに見ているものです。死んでいる虫も，生きている虫も見ているのです。そこで，なぜ死んだのだろう，クモの巣に引っかかったからだ。クモが食べてしまった。なんでクモが食べるのかというようなところからいろいろな疑問がわいてくる，いろいろな質問が出てくると思うのです。そこらへんからジワジワ命の大事さ，あるいは命の神秘さみたいなものを教えていくというような教科書があったらいいのではないかなという気がするのです(10)。

楽しそうに飛んでいた蝶の死という，ショッキングだが子どもにとっては身近な出来事をまず提示し，なぜ蝶は死ぬのか，なぜクモは殺すのか，といった疑問を経て，「命の大事さ，あるいは命の神秘さ」を教える，そんな教科書が必要だと言うのである。

こうしたアイディアに忠実に，しかも高校生にも通用する水準で，公民科「倫理」において「命の大事さ」ないしは「生命に対する畏敬の念」を教えるための教材として，手塚自身のマンガを活用しうるはずである。たとえば次頁の**図１**は手塚のライフワーク『火の鳥』の主題を凝縮した一シーンであり，その生き血を飲めば永遠の命が得られる不死鳥である火の鳥と，「黎明編」の主人公である弓の名手ナギの対話の場面である。憑かれたように火の鳥を追い求めるナギに対して火の鳥は，半年ほどしか生きられない足もとの虫や，三日の命しかないカゲロウの存在に注意を促し，あらゆる命に限りがあることと，永遠の命を求める人間の愚かさを説いて教える。そして虫たちは短い一生でも満足して死んでいくことを教えたのちに，「人間は虫よりも魚よりも犬や猫や猿よりも長生きだわ　その一

生のあいだに……生きている喜びを見つけられればそれが幸福じゃないの？」(11)と，火の鳥は問いかける。

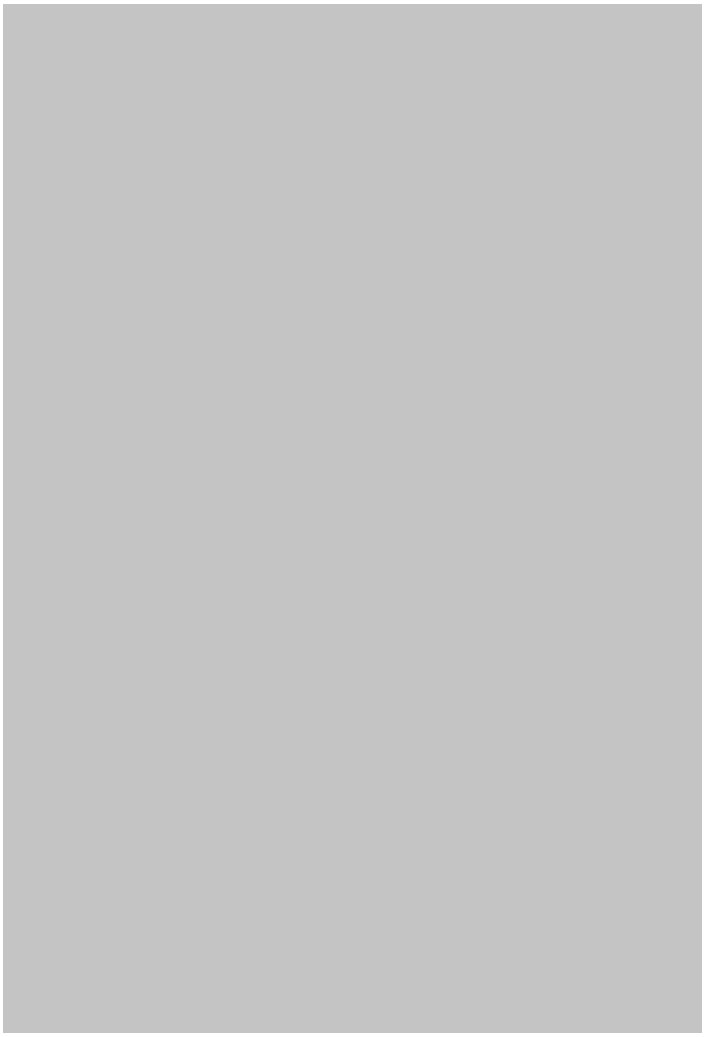
こうした火の鳥の問いかけを，読者である自分自身への問題提起と受けとめることで，生徒は一方では虫や魚といった人間以外の生き物との連続性のなかで，人間の「生命」の重みについて思考を深めるとともに，他方では人間が求めてやまない「永遠の生命」とのコントラストにおいて，人間を含むあらゆる生命の有限性とかけがえのなさにあらためて気づくであろう。また「永遠の生命」というテーマ自体は，一連の『火の鳥』の作品のなかでは，権力の限りを尽くしてそれを追い求めた，「黎明編」のヒミコおよび「乱世編」の清盛の末路や，逆に実際に永遠の生命を授かり，孤独のなか人類の復活を待望し続けた「未来編」のマサトのエピソードなどを紹介することで，より具体化して提示することができる。

図１　『火の鳥　黎明編』（角川文庫）一四六頁

さて公民科「倫理」の教科内容のなかで，「生命に対する畏敬の念」を深めうる場面としては，思想史における仏教思想と，応用倫理における生命・医療倫理があった。前者の仏教思想については，手塚マンガのなかでは「「火の鳥」の主題の変奏」(12)という性格を持つ，大作『ブッダ』を教材として用いることが考えられる。もちろん『ブッダ』は長編であり，また仏典に忠実な伝記ではなくフィクションの部分も多いため，この作品だけを仏教思想の教材として使用することはできない。しかしたとえば，作品中のブッダが悟りを得た直後のシーンである，次頁の**図２**などは，『解説公民編』の言う「生命あるもの全てに対する慈悲の教え」（九八頁）を，仏教思想に馴染みの薄い生徒にも，身近に感じさせるための媒体として提示することができるであろう。また作品中のブッダが繰り返し語る教えであり，作者の手塚自身の思想でもあったと思われる，「いつも私はいっているね　この世のあらゆる生きものはみんな深いきずなで結ばれているのだと……人間だけではなく犬も馬も牛もトラも魚も鳥もそして虫も…

…それから草も木も……命のみなもとはつながっているのだ　みんな兄弟で平等だ　おぼえておきなさい」(13)というメッセージは，新しい「指導要領」における「Ｂ　現代の諸課題と倫理」での，「自然」というテーマに関する課題についての記述とも合致する。「指導要領」では，「人間の生命が自然の生態系の中で，植物や他の動物との相互依存関係において維持されており，調和的な共存関係が大切であることについても思索できるようにすること」とされているが，これはまさに手塚の『ブッダ』のメッセージである。このように仏教思想の文脈に限らず，「自然」という主題に関する思索のための問題提起のきっかけとしても，手塚の『ブッダ』は活用しうる。

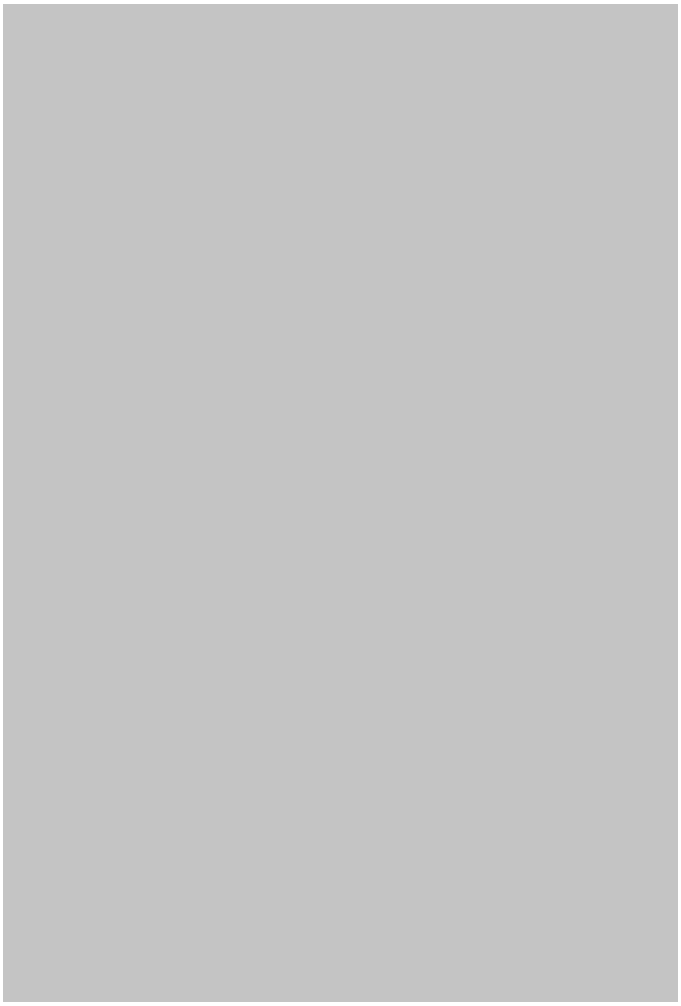
図２　『ブッダ　第６巻』（潮漫画文庫）一〇四頁



また生命・医療倫理については，医学博士でもあった手塚による医療マンガである『ブラック・ジャック』を教材として用いることも考えられるが，時代的な制約や，少年誌に連載された少年向けの作品ということもあり，具体的で現代的な生命・医療倫理の問題を知るための教材として，実際に授業で扱うのは難しい面がある。たとえば延命治療の中止や，脳死と臓器移植といった，現代的な生命・医療倫理の諸問題の概要を知るための教材としては，佐藤秀峰『ブラックジャックによろしく』（講談社／小学館）に代表される，現代の大人向けの医療マンガのほうが，登場人物や場面設定が現実的であるため，実際に授業で扱うには便利である。とはいえ，生命や医療そのものの本質を深く掘り下げて考えさせる問題提起であれば，『ブラック・ジャック』は含み持っており，こうした本質を考えるための教材としてであれば，『ブラック・ジャック』は生命・医療倫理の授業でも活用しうる。たとえば映画や小説などを題材にした授業を行っている，生命倫理学が専門の小林亜津子は，生命倫理の入門書において，命を救うことに執念を燃やす天才外科医ブラック・ジャック（以下ＢＪと略）と，依頼のあった患者の安楽死を請け負うドクター・キリコの対比を通して，安楽死・尊厳死やQOLとSOLといった概念を分かりやすく説明している(14)。これは高等学校の生命倫理の授業でも取り入れられる，『ブラック・ジャック』の活用の優れた一例であろう。また超人的な手術の腕を持つＢＪも，すべての患者を助けられるわけではない。むしろＢＪが心底助けたいと思いながら助けられない患者も多く，ＢＪの限界は，神ならぬ人間の医療の限界でもあり，この医療の限界を

前にして，ＢＪは何度も苦悩する。たとえば幼きＢＪの命を助けた恩人であり，ＢＪが「たったひとり尊敬するかただ」(15)と語る年老いた外科医・本間丈太郎の命を助けるため，ＢＪは力の限りを尽くして手術を行うが，そのかいもなく本間は亡くなる。**図３**はその手術後のシーンであり，亡き本間丈太郎の霊か影が，その本間の臨終のさいの最期の言葉，「人間が　生きものの生き死にを自由にしようなんて　おこがましいとは思わんかね」という言葉を，ＢＪに語りかける場面である。少年マンガらしい超人的なＢＪの活躍ではなく，むしろその影にあるこうしたＢＪの挫折と苦悩にこそ，高校生にも生命や医療の問題を根本から考えることをうながす問題提起が含まれており，そうした問いかけであれば，高等学校の生命・医療倫理の授業でも活用しうるはずである。

図３　『BLACK JACK　１』（秋田文庫）一一〇頁



４　おわりに

本稿では公民科「倫理」の根本的な精神である「生命に対する畏敬の念」，およびそれを具体的に取りあげうる教科の内容である，仏教思想と生命・医療倫理という観点から，『火の鳥』，『ブッダ』，『ブラック・ジャック』という手塚マンガを，「倫理」の教材として提案した。しかし「生命の尊厳」を一貫したテーマとする手塚マンガの世界は，容易には見通せないほど広くかつ深く，本稿で取りあげられた作品だけに限っても，本稿はその表面をなでてみた程度で，さらなる掘り下げの余地や，様々な別のアプローチの仕方があるはずである。本稿がなしえたのは，公民科「倫理」の教材という観点において，手塚マンガという無尽蔵とでも言うべき宝の山があることを，とにもかくにも指し示したことだけである。この宝の山を実際にどのように掘り進めるのかは，現場の教師と学生に委ねられている。

【注】

(1) 伊藤剛『テヅカ・イズ・デッド　ひらかれたマンガ表現論へ』（星海社新書，二〇一四年）。

(2) 吉川孝・横地徳広・池田喬編著『映画で考える生命環境倫理学』（勁草書房，二〇一九年）六～八頁。

(3) 秦美香子「大学教育におけるマンガの可能性――マンガ研究の視座から――」（早稲田大学教育総合研究所監修『早稲田教育ブックレット No.18　学校教育におけるマンガの

可能性を探る』学文社，二〇一八年に所収）六～七頁。
(4) たとえば，やや古い文献においてではあるが，「社会科ではとくに大胆に漫画を使っていくべきではないだろうか」と問題提起をする漫画評論家の石子順は，具体的な授業でのマンガの活用法として，「a 全体を読ませて感想を出させる，b その一コマか数ページを OHP で拡大してみせる，c その一ページあるいは一コマなどをコピーして全員に配る，d 教科書とのつながりを強調し，それとの関連，動機づけを訴える，e 教科書とは関係なく平和問題やさまざまな歴史事件，社会問題の副読本として使う」といった方法を提案している（石子順『漫画のある教室　教育に生かす知恵と工夫』あゆみ出版，一九八二年，一四九～五〇頁）。なお石子が手塚マンガの社会科の授業での具体的な活用法として挙げているのは，日本の古代史を題材とした『火の鳥』の「黎明編」および「ヤマト編」を，小学校六年生の日本史「国のはじまり」の授業で活用する，および奈良時代を題材とした『火の鳥』の「鳳凰編」を，同じく小学校六年生の日本史の「大仏づくり」の授業で活用する，といった小学校の日本史の授業での活用法であるが（同書，一二八，一五九頁），本稿は手塚マンガを貫く思想に注目することで，高等学校での「倫理」の授業での活用法を提案することを目指す。
(5) たとえば，手塚治虫『ガラスの地球を救え　21 世紀の君たちへ』（光文社知恵の森文庫，一九九六年）一五頁，同『ぼくのマンガ人生』（岩波新書，一九九七年）七五頁など。なお評論家の立場からは手塚は，人道主義や平和主義や科学主義や悲観主義といった様々な「思想」を器用に描き分ける，無思想的な「職人」とも評価されるが（呉智英『現代マンガの全体像』双葉文庫，一九九七年，二二二頁，また夏目房之介『手塚治虫はどこにいる』ちくま文庫，一九九五年，八七頁），本稿では手塚自身の証言通り，「生命の尊厳」を手塚マンガに一貫した思想と受けとめて，そうした観点から手塚マンガを取りあげる。
(6) 永井均『マンガは哲学する』（岩波現代文庫，二〇〇九年）一一八頁。
(7) またこの『解説公民編』の引用・参照のさいは，本文中に当該箇所のページ数を記す。
(8) 文部科学省『高等学校学習指導要領解説　公民編　平成２１年１２月（平成２６年１月　一部改訂）』二五頁。
(9) 文部科学省『中学校学習指導要領解説　特別の教科　道徳編　平成２７年７月』六二頁。
(10) 手塚治虫『ぼくのマンガ人生』一四四～五頁。
(11) 手塚治虫『火の鳥　黎明編』（角川文庫，一九九二年）一四七頁。
(12) 村上知彦「解説」（手塚治虫『ブッダ　第３巻　四門出遊』潮漫画文庫，一九九二年に所収）二六六頁。
(13) 手塚治虫『ブッダ　第１２巻　旅の終わり』（潮漫画文庫，一九九三年）一九九頁。
(14) 小林亜津子『はじめて学ぶ生命倫理　「いのち」は誰が決めるのか』（ちくまプリマー新書，二〇一一年）第１章。
(15) 手塚治虫『BLACK JACK 1』（秋田文庫，一九九三年）九四頁。